

国宝・志野のふるさと 可児

美濃桃山陶の聖地

可児では約1400年前の須恵器から、現在まで多くの陶器が焼かれています。中でもっとも華やいたのが豊臣秀吉が力をもった桃山時代です。可児の久々利では茶の湯に用いられる多くの陶器が焼かれ、文化の発信地となっていました。



牟田洞古窯跡の風景

なかでも久々利大萱の牟田洞古窯跡では、国宝に指定されている志野茶碗「卯花塙」が焼かれたといわれています。



「卯花塙」と同じ文様の破片
(牟田洞古窯跡採集)

大萱・大平の窯の歴史 (『大平窯由緒記』参照)

永禄六年(1563) 瀬戸の陶工 加藤五郎右衛門景豊が、大平で良い土を発見し窯をつくろうとしたが、反対にあい断念。

天正元年(1573) 景豊が、織田信長の朱印状をもって、大平に移り住み、窯をつくる。

慶長六年(1601) 景豊の二男源重郎景成が大萱へ移住し、窯をつくる。

大萱・大平には安土桃山時代～江戸時代まで多くの窯跡が土の中に眠っています。



大萱・大平古窯跡群位置

大萱古窯跡群にある窯

牟田洞古窯跡・窯下古窯跡・弥七田古窯跡

大平古窯跡群にある窯

山之神古窯跡・由右衛門古窯跡・紋右衛門古窯跡・窯ヶ根古窯跡・清太夫古窯跡

豊蔵による志野の発見

昭和5年(1930)、荒川豊蔵が久々利にて志野に筍の絵のある陶片を発見し、志野が瀬戸ではなく、美濃(可児)で焼かれていたことがわかりました。

豊蔵は、この発見の地である久々利大萱に陶房を構え、志野などの再現に挑戦し見事成功しました。

昭和30年(1955)、豊蔵は志野と瀬戸黒の制作技術で、いわゆる人間国宝に認定されました。



豊蔵が描いた発見風景



豊蔵が発見した陶片

可児で焼かれた桃山陶器

桃山陶とは、安土桃山時代～江戸時代の初期に作られた瀬戸黒・黄瀬戸・志野・織部に代表される陶器です。
これらの製品は主に茶の湯に用いられました。

瀬戸黒



焼いている途中で窯の中から引き出し、漆黒に発色させたものです。

瀬戸黒茶碗

黄瀬戸



黄色に発色する灰釉をかけた焼物です。草花文様を線刻し、緑釉や鉄釉を点じたものもあります。

黄瀬戸鉢鉢

志野



鉄絵の具で白素地に絵・文様を描いたのち、長石釉をかけて、焼いたものです。

志野橋絵向付

鼠志野



素地に鉄釉をかけた後、鉄釉を搔きおとして下絵を描き、長石釉をかけます。鉄釉部分が鼠色に発色します。

鼠志野草絵額皿

織部



鳴海織部向付



織部土筆絵皿

織部は、土岐市で焼かれ始めたといわれ、当時の茶の湯の指導者である古田織部好みということで名づけられました。技法によって、総織部や黒織部、赤織部などに分けられます。

弥七田織部



織部の中でも作風やデザインが異なり、弥七田織部と呼ばれています。
銅緑釉のたらし掛け、繊細な筆づかい、赤楽の使用などが特徴です。